

開催地名：長野県長野市	
開催日時	令和元年 11 月 13 日（水） 10：50 ～ 12：30
開催場所	長野市立裾花中学校
語り部	菊池 健一 （宮城県仙台市）
参加者	長野市立裾花中学校全校生徒、教職員 約 700 名
開催経緯	本校のある地区は、活断層があり、大きな地震が起きた際には、土砂災害が起きる可能性がある。防災マップは各家庭にあるが、いざという時にどう行動するかを考える機会が少ない。また、ニュースなどで災害について知ることはあっても、人ごとのように考える生徒が多く見られる。東日本大震災の語り部のお話を伺うことで、災害に対する備えや、防災のためにできることについて考えるきっかけとしたい。
内容	（１）震度 7 を体感して 私の住む宮城県仙台市若林区では、東日本大震災時の震度は 7 であった。震度 7 とはどういう状態かということ、まず立っていることができない。左右に揺さぶられ身を守る動作が取れない。火の始末や出口（非常口）にたどり着くことも難しい。揺れがおさまると私は自宅の外へ出た。海から 4 キロメートル内陸であるにも関わらず、海岸沿いの松の木が流されてきた。一人暮らしの高齢者を訪ねるなど近所の安否確認をした後、蒲町小学校へ避難した。家族と再会できたのは 4 日後である。 （２）避難所をめぐる問題 避難した小学校では、350 名程度収容できる体育館に 1,500 名もが寝泊まりした。ひどく寒かったがストーブが 1 台しかなかった。場所取りは花見の席取りのように“早い者勝ち”の状態であった。こうした事態の原因は、自主防災組織がしっかり機能していなかったからだと思われる。遅れてきた者や、トイレの近くを望む高齢者などはどんどん寒い所に追いやられた。仙台市では 245 名の方が災害関連死されている。避難所で、寒さから肺炎を起こした方が多かった。 東日本大震災の夜、私は避難所運営組織を立ち上げた。簡単な避難所組織図を作り、翌朝、役員会を開いた。私は運営会長になるよう薦められたが辞退した。避難所生活が長期にわたると考え、町内会長を核とした組織作りが良いと考えたのだ。町内会単位で活動すると、人員の掌握が容易になり情報伝達が迅速に行われる。そして体育館の内部を町内会ごとに区分した。避難所では人数掌握が非常に困難であった。最終的に確認できたのは 2 週間後である。よその炊き出しなどで出かけている人も多数いるからで人数が把握できたことで、やっと炊き出しの量が想定できるようになった。ペットを連れて避難された方も多く、苦情が出た。そこで学校長に話し、教室を 1 つ提供していただき、ペット連れの避難者

に移ってもらった。避難所では普段と生活時間帯が変わることも大きな問題である。消灯は午後 10 時だったが、もっと早寝したい高齢者などはストレスが溜まっていた。一方で子どもたちはキャンプファイヤー気分で通路を走り回っている。その音が床に響いて寝ていても頭が痛いなどの苦情があった。そうした方には別の施設を設け、移っていただいた。

また、避難所運営を阻害したのはまず情報不足である。情報が不足するとデマが飛び交う。さらに通信手段も不通であった。学校には消防や行政とつながる防災無線があるが、それまで使ったことがないのでどこにあるか分からない。やっと見つけたが充電されていなかった。結局、行政への連絡は自転車か徒歩で行った。その体験以来、防災訓練のときは必ず防災無線の操作を教育している。

(3) 子どもの力と訓練の重要性

今回の震災では、中学生や高校生の活躍が非常にすばらしかった。トイレの清掃、物資の運搬など、大人が嫌がることも、子どもたちは一生懸命にやる。各町内会での防災訓練というのは、炊き出しして、消火訓練をして終了するのが一連の流れだろうが、地震が起きたときに避難所でやらなければならないのは、炊き出しではなく、避難者の受け入れである。避難者の名簿を作って、町内会ごとに居場所を指定する。体の不自由な方がいる、物資はここに置く、トイレが詰まっている、自衛隊が風呂を持ってきた等、考えていなかったことがたくさん起きる。2 日後には、ここに自衛隊が物資を運んでくるだろう、炊事車が来るだろうということを予測した計画を前もって立てておく必要がある。自主防災組織が行政と連携して行う訓練が大切だ。そして訓練には中学生や高校生も一緒に行うことが望ましいと思う。



開催地より

東日本大震災を体験した語り部の生の情報を聞くことができ、生徒たちは災害の怖さや、災害への備え、避難所の事等々について何よりの学びの機会だったと思う。